

ヘドリー・スウェイン氏ワークショップ（2017.9.22）のふりかえり

“ICOM 京都大会 2019／東京オリンピック 2020 の文化プログラムを考えてみよう！”

### ルール1: テーマとリンクさせる

<ICOM 京都大会のテーマ>

#### **Museums as Cultural Hubs:**

The Future of Tradition

文化をつなぐ博物館:

—伝統を未来へ—

### ルール2: ターゲットを決める

若い世代の  
ひとたち

博物館に  
来ない  
ひとたち

地域に  
住んでいる  
ひとたち

博物館の  
現場に  
携わっている  
ひとたち

### ルール3: 独自性を考える

日本の博物館  
の良いところ  
って何？

京都らしさ

それぞれの  
博物館の  
売りは何？

日本らしさ

アジアらしさ

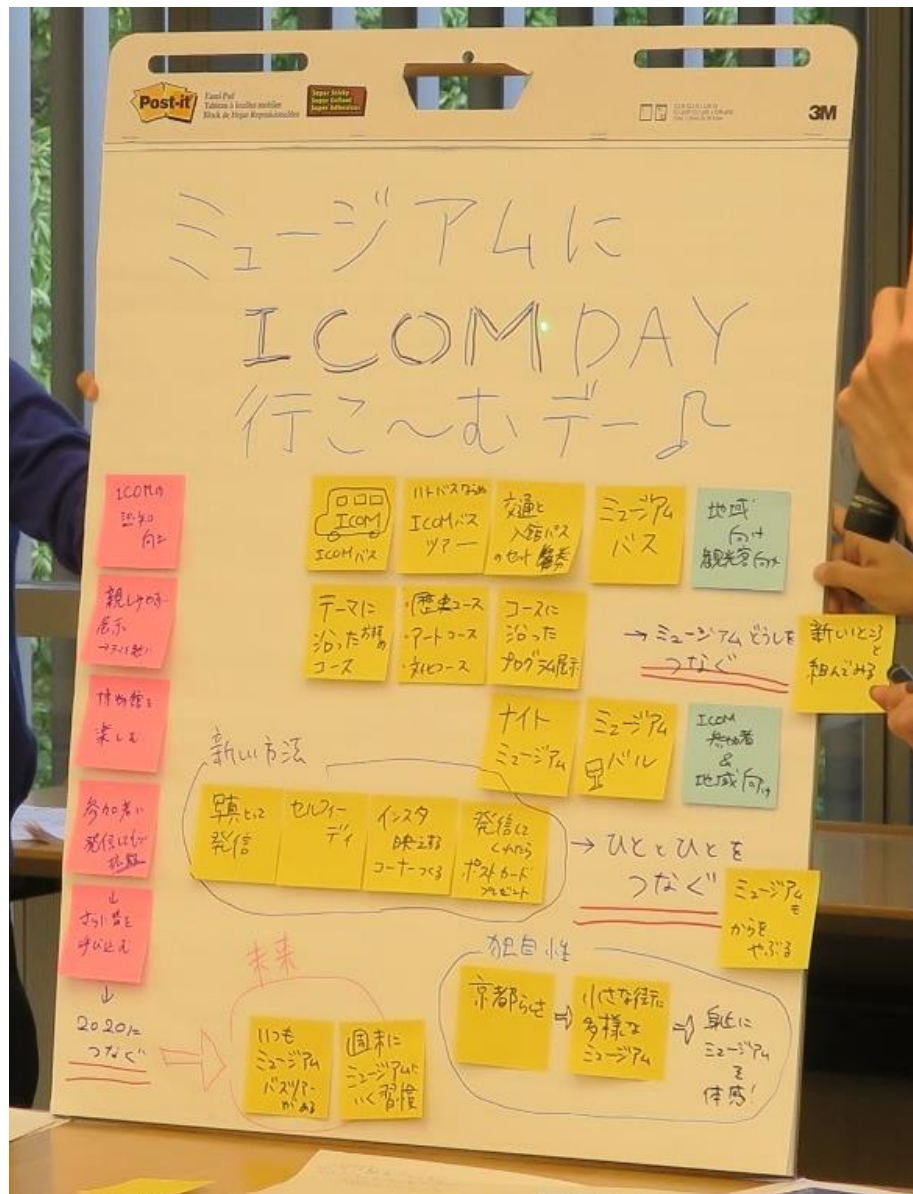
### ルール4: プログラムのタイトルを付ける

自分たちの想いやねらいを込めた  
素敵なネーミングを！

### ルール5: 10年後をイメージしてみる

このプログラムを通じて、どんな変化  
や影響をもたらすことができるか

# ICOM チーム A “ミュージアムに ICOMDAY 行こ～むデー♪”



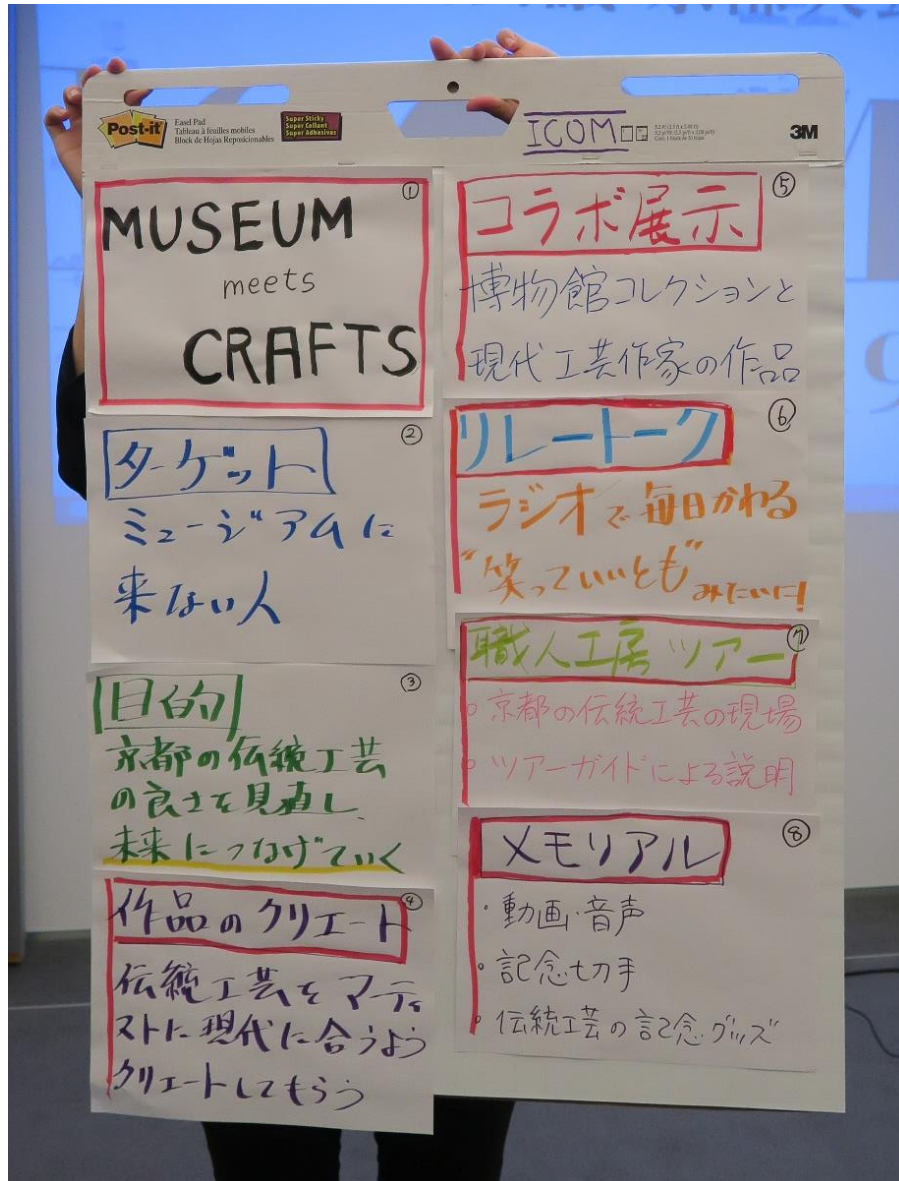
まず、プログラムのネーミング ICOM=行こ～む が  
上手い！（笑）

こんなミュージアムバスが京都を走ってたら楽しそう～  
普段の交通手段である「バス」を活用することで、まだまだ  
非日常的な「ミュージアム」が日常になっていくかも…

ミュージアムどうし、ひととひと、そして2020や未来に…  
といういろんな「つなぐ」をキーワードに、楽しみながら  
参加してもらおう、ミュージアムを身近に感じてもらうための  
工夫がちりばめられていました。

SNS をとりいれた、人々を巻き込み自らも発信してもらう  
「新しいつながりの方法」を提案しているところもポイント  
かと。

## ICOM チーム D “MUSEUM meets CRAFTS”



こちらのチームは、京都ならではの「伝統工芸」にフォーカスしたプログラムを展開してくれました。

タイトルは“MUSEUM meets CRAFTS”！

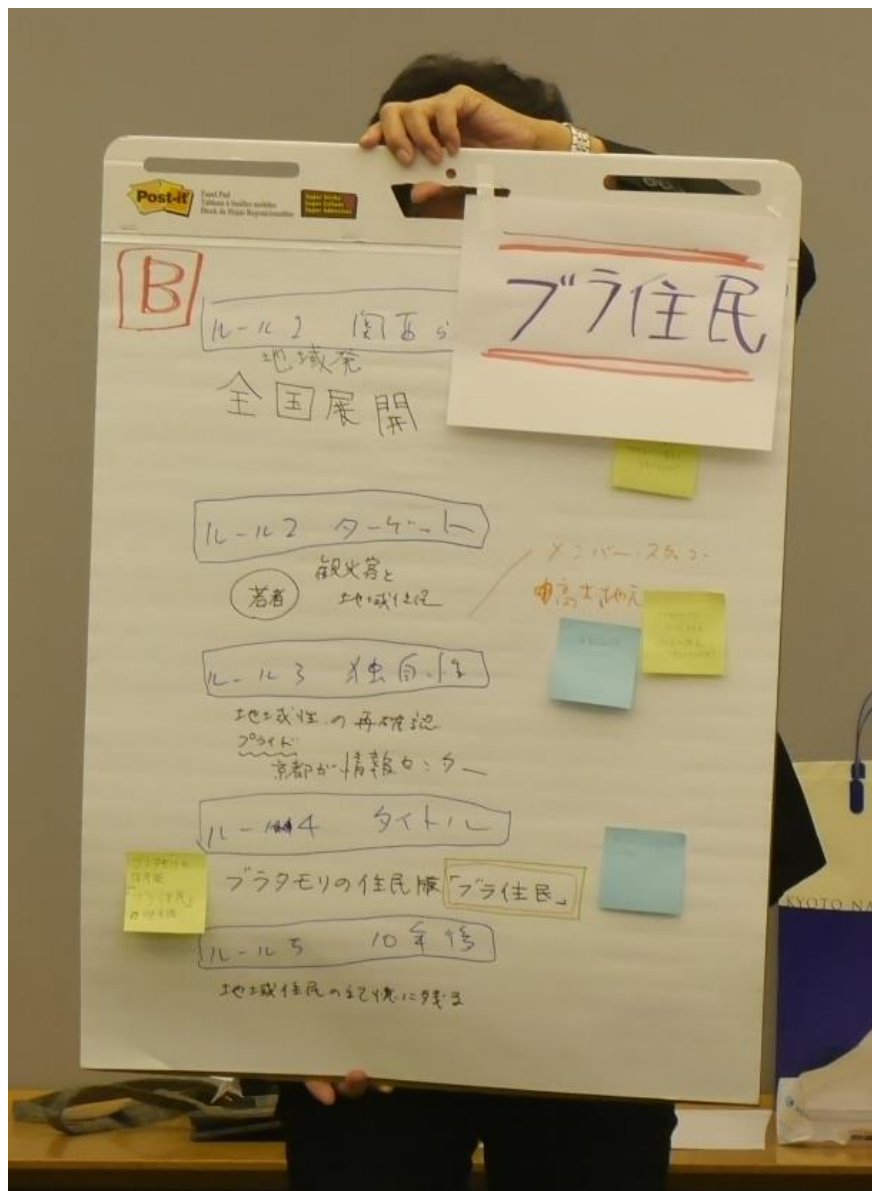
伝統工芸を通じての一期一会、「meet 出逢う」って

言葉のチョイスが素敵♥ですよ。

「伝統工芸」を軸に、現代アーティストとのコラボや、工房ツアー、学芸員・関係者とのリレートークなど、さまざまな企画が広がっていき、面白そう！ やってみたいくなります。

企画のひとつひとつにも、実際の ICOM 京都大会で使えるようなアイデアが沢山つまってるなあ〜と、感じました。

## オリンピックチーム B “ブラ住民”



タイトルは、ずばり「ブラ住民」！ ブラタモリの住民版ってことで、「地域の住民自らが自分たちのまちを見つめなおしてみる」というコンセプトが表れています。

地域住民だけじゃなくて、オリンピックのために日本に来た外国人も、“普段の日本” “日常の日本”を見れるから、楽しんでくれるはず。

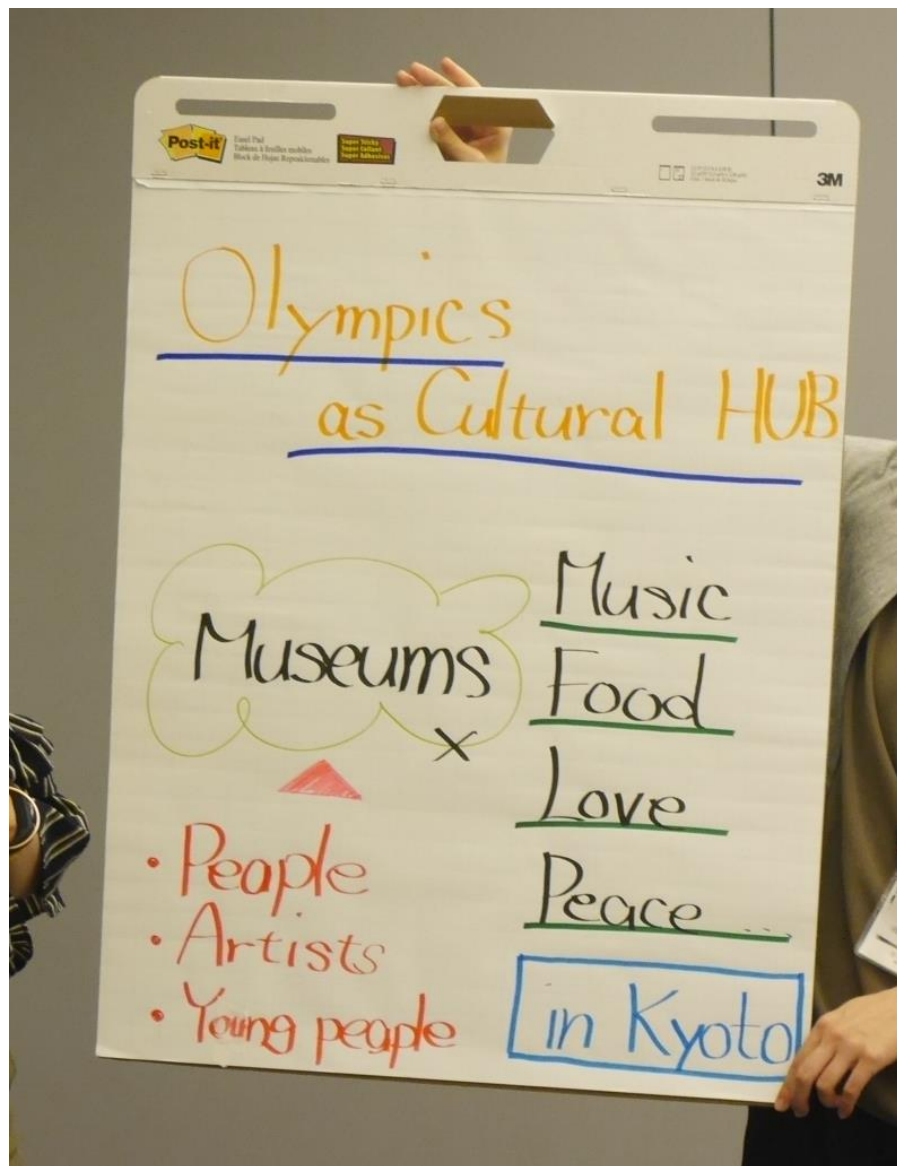
国や行政主体でない、自発性・主体性を尊重した取り組み、そしてブラブラ…というユルイ感じ、気負わない、でも何だか楽しい感じ。

この感覚、大切にしたいなって思いました。

このチームは、他にも各自がいろんなアイデアを持っていたみたいで、時間があつたらもう少し詳しく聞いてみたかったなあ…



## オリンピックチーム E “Olympics as Cultural HUB”



このチームは、2019年のICOM京都大会と、2020年の東京五輪を「つなぐ」プログラムを提案してくれました。

タイトルも、ちゃんとICOM京都大会のテーマ「Museum as Cultural Hubs」にかけてるところがニクイ。

2つのビックイベントを単体で考えるのではなく、関連をもたせることで、新しい展開が生まれてきそう。そうやって文化の輪が継続していったらステキですよ。

そして、ミュージアムが普段あまりテーマにしない

Music, Food, Love, Peaceを題材にするっていうのも新鮮!

Loveはクロアチアの失恋博物館を思い出しちゃいました。

グループワークの時、このチームからは、「オリンピックの負の側面をテーマにした展示を、あえてやってみたらどうだろう?!」という面白いアイディアも出ていました。